

堆肥の生産・販売に関するQ&A

Q1

堆肥化発酵に失敗して腐敗してしまったとか、発酵が進んで腐熟したとか言いますが、発酵と腐敗と腐熟はどう違うのですか。

A1

家畜ふんには有機物が様々な形で大量に含まれています。これらの有機物を栄養源として、その時の環境に適した微生物が繁殖し、活発な活動を行うため有機物は様々な形を経て、最終的には各種のガスや無機物と水にまで分解されます。

この時の微生物の行為、もしくは行為の結果が人間にとって有益な現象である場合に、この微生物の営みを発酵(現象)と呼び、その逆の場合を腐敗(現象)と呼んでいます。つまり、発酵や腐敗は人間が自分達の都合で勝手につけた呼び名で、本来は微生物による有機物の分解作用という意味では同じ現象なのです。

発酵や腐敗の際に活躍する微生物が酸素を必要とするか否かで好気性微生物と嫌気性微生物に区分されるため、形の上では好気性と嫌気性の発酵と腐敗がありますが、好気性微生物が有害現象を起こすことが少ないために好気性腐敗の言葉は一般に使われていません。

また、好気性、嫌気性の区別なく、人間にとって都合の良い微生物活動を腐熟(化)と言っているようです。

Q2

ちょっと古い本や土壌肥料の本などには堆肥、厩肥、堆厩肥、家畜ふん堆肥など、様々な用語が使われていますが、どれが本当の用語なのですか。

それぞれに使い分けなければならない区別があるのですか。

A2

化学肥料の無かった時代にワラや雑草、落ち葉などを堆積して作った肥料を堆積肥料=堆肥と呼びましたが、馬小屋や牛小屋の敷料を堆積して作った堆肥には牛馬のふん尿が混合されて、特に肥効が良かったため普通の堆肥と区別して特別に厩肥と呼ばれて珍重されていました。

したがって、家畜ふんを材料とした堆肥は厩肥と呼ぶのが正しいこととなりますが、厩肥には馬小屋、牛小屋のワラなどの敷料主体のイメージがあるため、鶏ふん、豚ふんも含む家畜ふんを主材料とした物を厩肥と呼ぶのは抵抗があるとのことで、現在では競馬場などの厩舎から出る物だけを厩肥と呼んでいるようです。

本来の意味での堆肥や厩肥が現在では、ほとんど作られなくなり家畜ふんが主材料の物がほとんどになったことと、堆肥・厩肥の用語ができた時代にはなかった化学肥料より肥効が少ないことなどから、家畜ふんを材料とした物も化学肥料とは異なる肥料として単に堆肥と呼ばれるようになりました。

畜産が盛んになり堆肥がすべて昔貴重だった厩肥より、さらに肥効に優れた物になった現在、皮肉にも、その区別の必要がなくなって、特に肥効に優れた厩肥をすべて堆肥と呼んでいることとなります。

(財)畜産環境整備機構 審議役 本多勝男

編集後記

今回の巻頭言は、全国堆肥センター協議会中央団体会員である財団法人日本土壌協会猪股敏郎専務理事から寄稿して頂きました。耕種農家の求める堆肥生産の重要性が示されております。

トピックスとして、「家畜排せつ物の利活用に向けて」と題しまして、農林水産省生産局畜産部畜産企画課環境保全班田島隆自係長から執筆して頂きました。家畜排せつ物の利活用推進の現状と国の取組が紹介されております。

耕畜連携の事例報告として、畜産農家と耕種農家(びわ)と連携の事例を長崎県農林部畜

産課森修蔵氏に寄稿して頂きました。

都道府県堆肥センター協議会情報として、長野県堆肥利用促進協議会の活動状況について寄稿して頂きました。

堆肥センターだよりのQ&Aは、皆様からの御質問に対して(財)畜産環境整備機構本多審議役が回答しています。読者の方々の堆肥生産等において技術的な御質問がありましたら、事務局まで御一報下さい。

FAX 03 - 3459 - 6315

E - mail leio@leio.or.jp

全国堆肥センター協議会 事務局